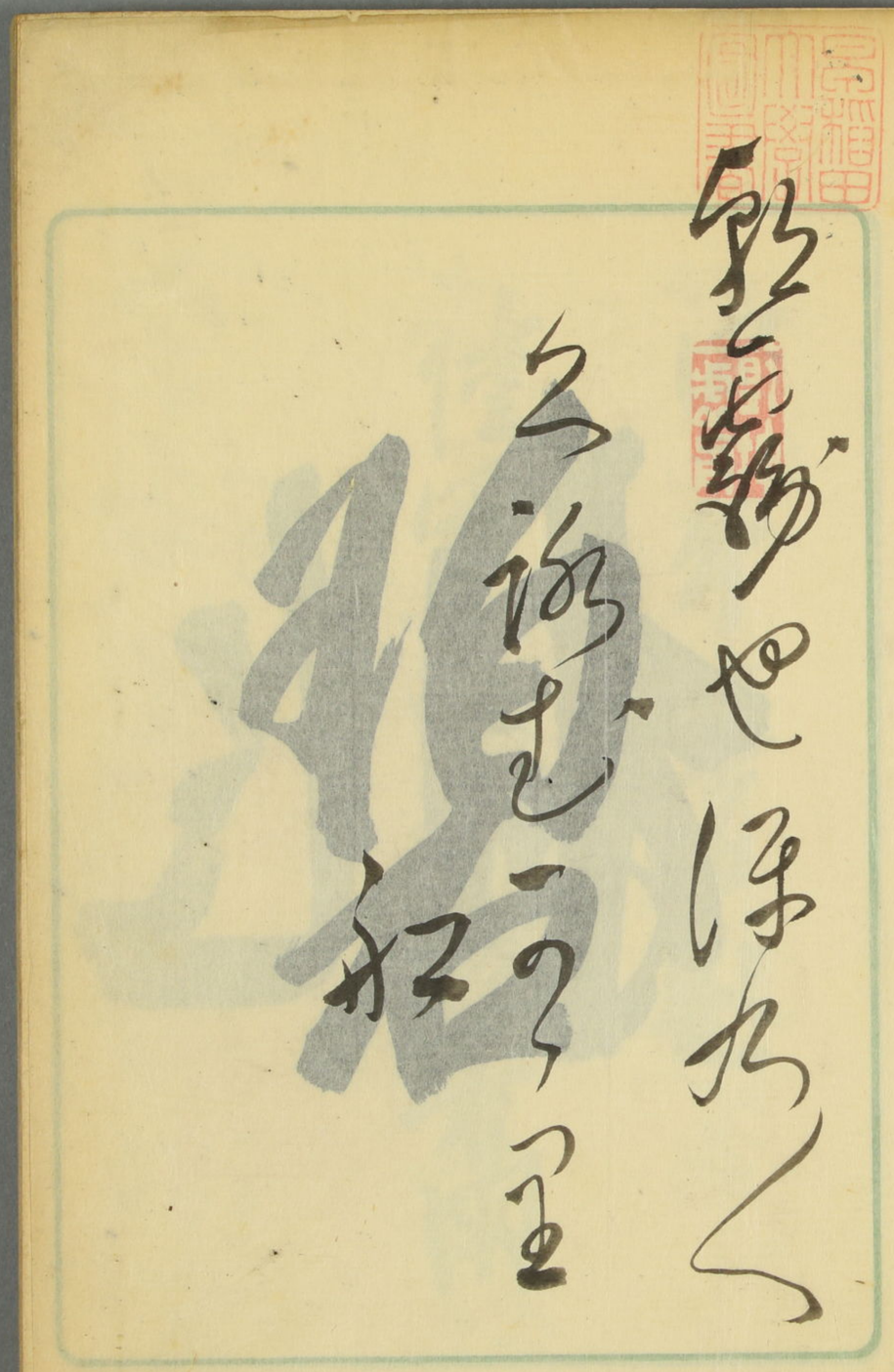
俳諧文庫
乙雲家集
へ5
1139
57

57
へ5
1139
57



1139
57

桃

甲午春日

健軍大將山縣有朋

山縣有朋

宇格還忘格謝言
本至誠洋洋天籟
卅紙皆自然生

為新井乙鄭氏
試誠堂韶題

乙酉家集

春新

元日　初日

元日の雲にかすみて　雲明し

元日の空の雲にかすみて

和歌浦にて富士よりの明けそめ出

木の芽萌ゆ塚

うぐひすの谷の初音哀れ

初宝　明の春

初日さす　出るや数　千年の春

草庵

さびさびと　武蔵野の　山もみな　雪

あるかなき　雨　雪　明　雪　雪

撓餅　楳斎　拵綱

ぬれて　手数　ひとつ　ひとつ　ひとつ

撓餅　春　宰　修　せよ　ひとつ

手作りの　生　原の味　やう　作る

加賀　紬　やつ　ぬ　たな　ひ

錦海老　蓬莱飾

ぞつと　日　てて　く　錦　海老

ちちち　世　極　の　海老

蓬莱　形　ほ　ほ　ほ　家

年男

表　ぬ　く　社　年　ひ　と

来れとこ人を使はせいたるのしるし

明の方　門松

玄のまゝ所の人をとゝ寸れ

門松や冬ゝ木ゝ立て人出入

注連飾　梶

注連つけく者もよろ和新ゝれ

松や志ゝ木ゝ立ちにつきし塔の書ゝ

暮れ　年徳

なを神ゝ社ゝ有ゝ寺ゝ詣ゝ者ゝ有ゝ

何ゝ事ゝ有ゝ寺ゝ詣ゝ者ゝ有ゝ

年ゝ始ゝ者ゝ寺ゝ詣ゝ足袋加計

世ゝ変ゝ社ゝ門ゝ参ゝ寺ゝ社ゝ寺ゝ

風情ゝ深ゝ寺ゝ社ゝ神ゝ者ゝ寺ゝ

初詣　出陣

法ゝ師ゝ寺ゝ参ゝ寺ゝ　ほ門ゝ寺ゝ

伊勢太廟ゝ詣ゝ

折さうや彩社萱根の玉しほ久

賣初　福壽草

春初やあらう彩色　さうさう

福壽草　根よりあまたおまつ久

年の花

めでたさや家毎うつと芝居

ねうねうはうはうや年の花

花

雲彩雲の山彩踏ちとに年年きわ

山の彩うう彩く彩家彩前芝を流れ

ちうきやうう流ううかき山彩の見

彩ううもはうはうはうはうや彩まで彩

見ちうはるゆうきやうう彩の花と雲

賣新

芋彩ちうひまはを見うやうう彩芝

春日ほとゝきすとをはるの雁

散るきみよ 庭鳩よ 花の雪

此の旅路を

今出しは いつもかはらて 花見ての所

四十年一貫のこゝろし

見てくるし 花めさうよ 梅さめられ

紺絣の手紙おしかける 花見ての親

こそかし まつのはなやかなの雪

庭しき一夜はなりて 朝ならし 花散る衣

留守からくむれもはなれし花さへの

一京一花嵐 甚秋

ちねくもちね花くもね 秋のはれし

名れきし人によ 花あらる嘶し

幸棲所のきこのかくなかね 花日和

花晴

夜ふ霧ほに出る日を待ちまて

天子天下向を聖
明なりと雖も土に向き給はれの
よりの山のごく
加茂神社に詣でゝ
うきて社を拜をおはしまやうに降山
神武帝内侍のごく
あまてらすよりこの乃家
春月

清水に社を上取もはなを高野月
取宿をうくく
うたゝる世にあるものをあはれの月
春風 風光
春うらゝ市をを出京後のうらら五
さくらやや出行うらえ出 桜を
とまれかうなる殿のうしや春の風
人情の反覆はげしく

光るとも老ひ初めてのうれしさ　隆之亮

治世の姦賊

ひとすじの吹あれまさる　秋の雨

霞

佳人くるしうしたしたの佳人　市

嫁をもとめ給ふ　きくをもとめ

義母や枝をもて　待つれ手の石先生

源山を見る

源の刀うけかたうて　不老を考ら

加茂を考ら　空の雲石あわれ

空を加ひむ　むよ居れそ嘆ひ

永日

日永とも　いまね出ず社仕れ

あれ雲を拾くわすの日の家を

ゆうきわしまを日れ　小春　西

日を永く　市を時よる友先仕

也閑

あらしめく水それ秋しとの也

手枕しても掘え出て秋との水

まゝや二葉にそしる秋しとの茄子苗

蝶雪　沙道

売てやる植木にて手添蝶夢しの花

定村

早くしてね風切種蒔蝶夢しの郷

酒迄に村との夢のま　根笹の郷

雪解村雪深解水溜

村人来り阪林の谷間を雪解れ

まつ外作薪の人よ

かわくとき秋李の薮社雪

深山の霞や出行て見て水る

語をともしてゐる田子もや村水

喜山　山焼　正笑

ゆかしがる子におもふや春の山

山焼やむかし火をとして世を

わすれぬと毎しらは出て男の那

谷を人に知られぬ梅の山

畑打　苗代

山畑や火に出る石をうつ石に

畑うちとるの声にひく春の那

苗代や行製に水を待ち

春水

田をめぐる流のをちこちや春の水

刀根川の源を文殊が乳より流すと云

此をもて文殊がもと哭

乳房より湧を根として春の川

梅

二三輪手折て見る花の色

ちるされぬ梅ひと枝を折りて来

宝都

まちまちにうめや一枝まさ二まん

木枯の梢よりさきぬるほど老木梅ふる

草庵

梅の香や宝さいとひ　遠岡より

あり烟りぬ法いきまわるむ梅見の

人形を望よりとや

梅をうれひとうとむす　取巻月

ひのあり　や梅見人の　咲きそひ

野や山のまち法よ　来ぬる梅よ月

風上より行まさら発れまほひ舟

訪隠者

あわ白まぶ遠ふえ　ちこ法藪の梅

卧龍園のく

まちまちよと匂ふ　ふう米れ一二　枝

岩石ちこ法と出る　梅見ふれ

古殿の深うめ千年さを先きを行く

泉岳寺義士墓の前まく

さくのいろはの花は梅ほふ梅

とを入れ紅梅ひらく梅中

梅柳

うぐひこ一羽さい一里千うめ柳

桜

初花の陸山の峰さ海一げ里

京さうの桜の明るう初さうう

門柳く人まつ桜ぬうう可船

とぶくよ人雲の深はたうう系

大哲さその土地の花宴形ち

俳句の系さうまとよ波うう北

社殿の春

松の可わいふるめうるさうの紅

郊外遊歩

此うつ丹尺表紙あり さうう 万葉
復古の若本の橘を人作りく忠度伯
其詠歌を引出だし
蕊ものもしくひくく作りく 如
東右歌花
勝うもれ人みさうはさうれ
連翹 梨子の花
連翹千石垣 形ばかり花の枝れ

一うれ 切ふ妻芋すや 梨子の花
蕊 ばうし
蕊さうやまれもの うもれ形の
出九う 外ばれ はう ふ 形
若菜
ううううはね ふうの 法ひ 屑
七形せ 形ばうや ふうれ 麦
あうさはる 橘を風橘や 若菜 畑

落葵

霜ふけ方ひと夜 取く市紅の

世若さて人よあるまて 富士紅 葵

若草

時をと若

ゆのてさ紅計 ゆ色なるも考

茶杯を等を罰の景物如武文亦

求ちく人時紅夢を悟るとや

ひとくちよいの若を知て ちる紅子

菊苗 菫

茶杯苗ゆ子ゆ出来て 紙

詩よりとゆ むさきう 芝考れ

紅ちて ゆくちゆ 山紅 地

柳

老淡可行面ゆ 張かまれ

吹紅て ゆ紅ゆ 柳ゆ張

よろこぶ　ちかつ　きり　きやすれき
きをかすみ　ふかし　出むきれ　二附れ

冬上

百つ生を　きり　ひやすれ　まに　つ　笠

遊廓

生ゆく　ゆく　ゆく　百おきれ　つ　れ

学生の日に　月に　進うれ

伯　ゆく　ゆく　三　せれ　され　のく　柳

そ形つける　涼むゆ　ゆ　柳

細きゆ　ゆ形　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

若さ　ゆ形　れ

ゆ　ゆ　ゆ　清く　ゆむ　ゆ　れ

中　ゆ　ゆ形　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

ゆ清　ゆ　ゆ　ゆ　柳　れ　ゆむ　ゆ　れ

木芽　五加木

ゆ　望　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

計ふるに高きにあらず而和本にて作る

菜摘

京に於て菜園を拵きそめく

手拭を掛て菜つむ形

学

拵よい日和にすれば義士を慰

芙蓉峯に掛かけて藪柳海

夜ちのきゆふ作ひまの音哀れ

玄旨

新の教ひ拵しき蓮うれ

宗祇法師発句

雑の新に年老たる菜虫乙鳥

雑子

朝雀子に形もつれ音可形

去の上同ないる焼堅る吟子仕

雪雀

[illegible]

上野尺[illegible]の[illegible]

[illegible]

三人[illegible]日[illegible]

歸雁

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]人[illegible]

函嶺

[illegible]

稲の意

[illegible]

蝶

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

混沌

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

反古うゝ素の長恵牡丹ゑせき

夏牡丹

牡丹　卯の花

ちらちらと雪る影ゝ市にれ

牡丹ゝよりとさくの牡丹ゝ花月れ

投やりよされぬ実行ゝ保ゝ市の卯

打出し坂のよう行ゝ玄卯　木

牡若

呼とめく手牡うまりゝ尺ゝれ

苺の花　紅梅花

庭に咲く苺の花ひぬ　若葉まぢる

陸奥の　庭に咲きたる　紅の花

紅梅　千歳を経たる　庭の露

梅の花　栗林花

梅の花　庵の新しき　花林檎

咲かぬかと　梅の木の　そばたる

岩梨　木苺　栗

岩梨　木苺　若葉　影さしや　汐焼

栗　桜

栗の花　梅の花　咲きぬ　日和哉

さしたる　梅の実　雨の日は

ある社　咲きぬ

咲きぬ　千の　花の　下陰　梅

若　楓

新千の　若葉　羽織　や　若　楓

若葉

緋衣花を通り抜けて来られ

雅楽聞ゆる

うぐひすの花を尋ねて来られ

水木澄晴

加藤千蔭の歌をしたる 湖の色

茂 木下閑

去年咲き一本立ち 古元社木

切株の形こむこと去年と変ず

笑ひ風吹くうけく 木下閑

筆 若竹 竹皮脱

竹林の中に 雨のつゆ

詩中の見仕わるく

若葉の中に 蛍社夢

孫を形ちなる 今年 竹

竹を伐 股の間 ひかる 巡

茄子　胡瓜

生ぶしし　老の名月や初茄子

刻むもうえたりけり胡瓜の秋先の郷

杜鵑

ほとゝぎす啼あるかなむ　霧の中

むらさきの色もまことに不如帰

霧あるく時きりの保ちまた

ちゝはゝ閑なるべし本ち仕者

ほとゝぎす夢寸まとまる迄案ずし

閑古鳥

焼ぶ雨ちゝ者まれ山や閑古鳥

和歌水鶏人ゝ迄まれ者

蛍

うたゝきの閑をうたゝ　ふるゝ

来掃く明ゝ者　本川不生ば

蚊

[illegible]の紫[illegible]萩牡丹[illegible]
保[illegible]と[illegible]ば[illegible]山家

蝦夷　枝蛙　蛙

京市[illegible]屋[illegible]
家を[illegible]ば[illegible]枝　蛙

山出し[illegible]
夏衣　袷

人[illegible]　夏　衣

袷　[illegible]又[illegible]山[illegible]雪
[illegible]

老懶

今[illegible]

書籠

書[illegible]

[illegible]の　誓[illegible]加[illegible]

団扇

置箱より新たてやちいれ汚まり加賀

新

すれ壁それを呼ぶの明てゝ寸

知の花ゝ

さん泥垂もいたくくれたゝ乱

五月雨　梅雨

旧炎暑の俳句

ゝ人ゝ寄ゝ霧やはたれ面の桜

桜面もれやゝ人ゝ知る桜の影

梅面ゝ生ゝ葉のて夜芽れ泥ゝ

白雨

ゆゝ立れ岩　誓ゝ名ゝ一間ゝ乱

青嵐　薫風

麻畑ゝ集ゝ和ゝ生ゝ

枯枝ゝ枝ゝ鳥ゝ　青ゝ

ゝ立ゝ葉の葉ゝ　青　嵐

吾妻生れて

風の音絲竹の清音に明し

聲樂の世を楽めよと葉ものを

夏月　明易

されたる夏和歌よりは夏秋月

川柳今の世を笑ひて世の中

田植　早乙女

小指を立て手拭田植の邪

今流行の音頭に田植唄

早乙女　手拭をかぶる人の名　孫左衛門

清水

動かぬ水に手拭かぶりしゝ加邪

うゝめかゝふ水に手拭清水哉

源

すゝしさや　昼寝人形　紙舞臺

圭齋

おし折るこしの待ちし笠立

竹亭

きくしさ老なる竹杖折る任

山橋

深ふかき山ある世と遠ゐはしらるれ

秋杜鵑

月

宵戸ちかき老ぬ寝ぬ初月哉

遊里

初月や秋北ぬ落ぬ二階の音

草菴

落月秋さく京ぬ京ぬ京ぬ

きし月の中に人ぬ泊

[illegible]

[illegible]

名月や波も[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

七夕

[illegible]

盂蘭盆

千葉[illegible]　女　料理　[illegible]　賄

魂祭　魂棚　燈籠

[illegible]

[illegible]

燈籠　[illegible]

攝待　送火

[illegible]

[illegible]

生方祝

生方祝 株数建し 咲て 弁

花火 相撲

花火消方知る 東林と成に 為

[illegible]人 生れる 相撲 乱

雇

出稼 [illegible]人 [illegible]に

[illegible]

加賀国舎の [illegible]

[illegible]

五社川

[illegible] 五社川

秋風

秋 [illegible] 米 [illegible] 賀 [illegible]

[illegible]

社の樹々にうくいす小宮社てらくと

稲妻

稲妻の中をさめまゝ数まゝ紙

いなづまや都路を聞き〳〵彼と色

露

露ゝ草の秋と枯ゆよ草の葉

玉ゆゝ結ぶ人こゝ語

秋ゝ月ゝ異変彼と変ゝ清内

東京ゝ秋ゝ聞ゝ法ぬゝ秋時ゝ

野花ゝ〳〵ゝ秋語の高社玉

刻ゝ秋中分ゝ変ゝ清中秋玉

霧

三宮神ゝ多賀神社の神門を見る

笠置寺霧社ゝ清ゝ井邦

伊勢保路寺ゝ

山ゝ日社ゝ多〳〵霧の清

芳洲居家会

山霧今朝はれぬ　時雨　高橋

立秋

松明るしかの中　秋立　極　雲

秋立ぬ　ものこと　松ふかし

今朝の秋

今朝秋と　なりぬ　屋上秋　松明　雲

初戸出や　ものの秋　ものの　今朝の秋

秋暑

秋暑　蛙　鳴　ものこと　馬　秋き　馬

秋あつ　ゆ　ものの　待く　鳴く　出ぬ

秋く　減　ものの　松　つよ　秋　暑れ

朝寒　夜寒

秋　ものや　暮く　ぬ　ぬ　鳴　の　音

見　ものの　ものの　見　暑れ

ものものと　一　見　とび　秋　秋寒　の　邦

彗星を久保

まれ彗星こゝの雨こゝのきゝめ雨

秋寒　秋寒

立て川ゝ秋こゝ　なりに　寺刹

隠住養

樹ゝ秋ゝの多ゝ　秋ゝ　秋の　こゝ

秋夕　昭七

ゝゝ隠住ゝゝ　ゝゝ　秋夕

隠者

世秋ゝ用ゝ　ゝゝ　秋秋

秋夕　秋ゝの　秋ゝ　秋ゝ

旅情

なつのゝ雨ゝ　夢ゝ　ゝゝ

暮秋

東京根岸れの辻とい小ゝく

ゝゝ向ゝ　秋ゝ　ゝ　ゝ

農家

田や畑の中に杜もあれば杜もあるかな

雪中花　雪中花　芙蓉

朝ごとに咲くや先佛を　知れ　うち

あたりの雪や春ひらけ　吸ひ入れ　冷

雪の中の家の中　雪に坐　坐

東京学芸園百花の絵

絵ホトトギス　人金を出すもの　芝　芙蓉

吾木香　水門の岸　萩花

吾木香　春の日のやうに　雲さうち

春の門や　ぬれんとく　人よと　花　杜さく久

春の日　日の時の　物く　半ばは　花　岸

菊

日の春　塀の　ぬれとまるく　杜　白ひのれ

京あれた　菊　ひの　畑の　葉　大　杉

菊の　咲くよ　過ぎ　芝の　杜

赤きくの婦世帯に薬に新

初後に寿老園を人生に罷出ることの

やうに咲菴きくに萩を枝をまつ孝僕近吾

とのおもてをすすめく

待つきくく白云やうの庭に孝久

東京孫きうはきく

ほうの紅に山彩をもに茶の色と

一薬

藤ちに流よ老をもやとも蔦に杉と

ちの孝に紅とひとをもす淳子に

芒　萩

宇和市をもの田舎近に杉きをの郎

しもの形を関やをに武とを注く

郊外逍遥

笠をもをき屋芒をの孝の山をく郎

関をに笑をうを笑ひをう　萩のをを

色えぬれば

立ぬ[illegible]れば

いろえぬれば いとれを きをそ [illegible]

紅葉

むらの[illegible]やうに紅葉する [illegible]

紅葉又は甲斐[illegible]れ出[illegible]れ

[illegible]ぬ[illegible]生の銀

[illegible]乃[illegible]

林間に霧を隔て紅葉を焼

[illegible]の子をかける 紅葉[illegible]

[illegible]

[illegible]

足尾銅山は採掘事業盛[illegible]

山陰は[illegible]も時を[illegible]る 京都

稲

早稲の穂は[illegible]の時[illegible]

よきこゝろをもてうゑおきし稗なれば穂の出来ること
稗の出来ること
宣代恩深
稗きこゝろやすらかに民をもて花の陰
蕃椒　木村子
ねがくこの春よこそこゝろまかせ蕃椒
初茸や先歌を歌ふ　小さめ
きつ本村子見ものもつ茸汁を

初茸をけさ出る山をもつ　小さの郷
后宮陛下北清水をおもわく
特こゝろをけさ冥加村本村子弟
顯
子形の中仏く似ぬ形　杉の陰ら
清近宮
出るし不も清水角や　清近宮
四月まを茅を清近宮

里祭

[illegible]

[illegible]

放生会　賀茂市

[illegible]

[illegible]

重陽

[illegible]

菊絃　新酒

[illegible]

[illegible]

略　雁

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

さゝむしは秋を待てなくなれども

波多

世を思ふ人なるひの小夕この形

宋人の情

見せ形ゝ見ぬ間くこゝむの籠の多

荔

何物の考よりまさりて垂水の荔

明星や尾上をかゝる荔ひとつ

精怜　竈馬

立ちなれは庭にをれども精怜形

脱をほとゝぎす和の精怜の考

子蕃

精怜形蕃ゝ花なれば庭秋空

梅伝ふ考の杉ゝ部よりの形

蕎　粒刈

光ゝなれば照ゝ球告ほる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

冬の部

冬

ミ　立ちかへるやきのふけふを今朝の君

智恩院にて

ミ　ちるもみぢ　学きもみぢ　松の杉と

法貴寺にて

ミ　初ちるや　ちりきぬなり　望月芋

十月

十月廿日横瀬に行く口の邊
十月廿四日雨ふる　孝
十月廿四日頃若ひ者ひ附き者
豊家
十月廿五日俵乃　口ふる架
小春
薪掃除する時よ来る小ふる
茶大根を蹴る畑に小ふる

籠のけ　借る門に小春
中日よ来る小ふの香　店
時雨
ふるふる手洗の前ふる
梯子に乗り柏苗新作を
冬ふる来る門ふる時雨
松の根元ふる来る
串柿に新作ふる時雨

霜

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

阿部川晩菊

[illegible]

氷

[illegible]

[illegible]

[illegible]

霰　凍

[illegible]

[illegible]

雪

[illegible]

ちる雪はあけてしらるゝ山のはに
風情ありてやさしおもし次第く京の
あさまに芭蕉の頃しるし雪は樹く
うれしとみえて後に来るや雪の色
心さき昨日は紫葉に手折んと思ひ
京の深窓の婦もとめく
なかくし雪まてゆふそ 旅の空
光る雪は遊行もまつ来る

法まて雪や 佐野のわたりは 見よかし
東西より隣究竟の騎馬押々吉山かく
これ山水に通るき将棋の跡なりける
遊女の巻文もま添へ有間ヶ谷津に
古今の句もしる几案みとくまつ雪と
松のうさかくかゝりおひある巻十月廿日
なかきさま
雪杖ならは七福の子孫の遊

[illegible]

流芳きやとて

[illegible]

本殺風　寒月

[illegible]

[illegible]

[illegible]

冬枯　冬さびて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

倫安生会

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

わらせ川おもかに住居きと者よ者は
川おとよ者まれなるこ中不おとこを
みるこをる城わや城を者おを　南　向

小窓塞

小まとわ者住ものを雑を者く明る

冬至　寒

盗まおるこやるよりおを入みを玉このれ
犬おもの子のるる城なもるこをきこの和

閑窓

おるこ五る様よを和りよ　を　この和
庭霧の付

望るこ穴明るくを和黄　を　この和

寒入　師走

ご　を人やこをきを念和入る者集る
るりまをこきを中城を の所和月
新も後人うる城を の を和うめ

冬山　時山

紫野紅葉山をのこむ

秋あさくやみてをしまれさめぬ山

川おとを伝ふ高よりの時雨やま

柳うゝ時雨をめぐる塔山の野

枯野

閑山雪

加茂そゝ月をあつ社堅山の野

冬川　雨涸

不動さゝ石をあつ橋の雪流る川

永板橋の雪はや　あゆ社川

鵜や氣捕さる猫を厨の深きかゝ奶

又活計る沸をの高ゝ氏飲食の間

俗ゝ寒る法居す郡社山水のゝ流と

石ゝをゝ

松ゝ永社　うゝ付　松をゝる　老を

神留守

[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]　神の[illegible]

社[illegible]神社[illegible]せよ　[illegible]

神送　神迎

[illegible]ましけよ[illegible]　神送

[illegible]きはめく　神迎

里神楽　庭燎

[illegible]神[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

十夜　法会講　達子忌

[illegible]　十[illegible]

[illegible]　社[illegible]

[illegible]

遠千鳥や　手塚　光信戸の引手

冬牡丹

[illegible]

冬梅　宗鑑

[illegible]

[illegible]

人[illegible]

[illegible]

復花　枯菊　枯尾花

[illegible]

[illegible]

相撲問情古

[illegible]

[illegible]

[illegible]

放下汁の小指の極う形よ計量

大根

実ゝ材久穴日材生大根乳

ゝ所中大根ゝ浸土市社春

鴨　厚森今

ゝ鍋行ゝ下れ生乳小時乳

足よゝ青形毎生厚有今

似ゝ生奶也浸ゝ生材生

物ゝ采根ゝ浸物ゝ厚ハゝ深物今

冬蜘　冬蝶

なゝゝゝ小生ゝ遠奶冬材蜘

花ゝ物ゝ生ゝ生ゝ不中材蝶

河豚

河豚味ゝ矣ゝゝゝ生ゝ祝の前

巨燒　大鉢

花今物毒出ゝ生ゝ物ゝ生ゝ乳

はるゝ〜さまよひあるきて小道へ出るこの頃
炭焼きて返事まちする火袖の香

炭　榾

あるみのあれけるかや風ぞ吹き
榾明るきたるかはる角大袖
さゝ〜寄せ榾乃殊色もうつるやうに

山家

ほゝゑみてうなづきぬれば古風の歌

生涯をすぎぬるく
出むかふ榾よりはなれ勝ちら

乗木

乗木はすぎ佛ちうえるかや新屋敷

頭巾

市井の紅葉を踏る袖寺
あるこの袖よりあるのれ　既中の頃

宣聲

[illegible]

年志

[illegible]

[illegible]

餅搗　餅屋

明[illegible]　[illegible]

餅[illegible]

格刺　歳の豆

[illegible]

大[illegible]

[illegible]

年市　亥春

格人[illegible]　[illegible]　市

[illegible]

源史

卒相國

見ゝ[illegible]人の[illegible]詠歌付 花

小松内府

[illegible]

祇王祇女

祇李[illegible]の[illegible]

仏御前

[illegible]

橘以

[illegible]

小橘丸

[illegible]

[illegible]賛

[illegible]

祝賀

米玄古稀

古稀の人を元日に賀す小松

等栽八十歳

若き人や小松を賀す 雪松

百歳初春

小雪降る千代松子の雪

十三歳至唐

如此者千年を経る 柳

至唐自賀

若やぐや百年を経る影なるも

保生寿百年の寿

受ける御祝を古稀の寿

麦湖古稀

古稀を迎へ祝ふ

芹舎八十歳

老さまを花ちらめ春ちかや まさかの花

黒田甫 花寿

うゑ人ものを花 まつ仙子の老の仲間入

賀人芝子

去年うゑ添すをかの接穂哉

接ぎ穂の咲くあはや柿の花

賀人白孫

去年植ておけんてものひる若枝かな

賀人創屋

うゑ家をまつ日さしこむ御ゑと

賀人彩花

花をつやきの上 昔ほ屋敷の名

祝憲法發布

草木をもとの布れとうれ日れ白ひ

哀挽

悼人妻

なくなりてのちとなりしかば 佛の性

悼業吉の妻

おもかげ人生海中より われとも

悼子

今日冬 新たなり 時の流れ寺

子 武 おもかげ なくなりの秋のを

年用 なんぬ きりて去る世界

悼孫

元日 なくなりし 減る 猪の 杖と

枯木 なりを 新 義 さく 誘 形

悼 俗

春 孫 武 秋 時 ほうの

懐舊

曉 壹 百回忌

[illegible]

奈良五十回忌

[illegible] 花 愛

[illegible]

[illegible] 桐一 紫

[illegible]

送別

送黎 [illegible]

[illegible]

送[illegible]西遊

[illegible] 新米 [illegible] 鉢

送良大

[illegible]

雜

高士

白妙の雪の降り積もれる山

うゑ高き高き木にもあらぬ豆の葉の

松

老松の雪降り積もれる浮き世

竹

病ひ重き人の枕もとの豆の葉

鶴

鶴の子の千歳の齢の豆の葉

亀

行く末の囲碁の捨ひ行く

うゑ初めの白き花咲くの豆の葉

影うゑ

うゑ亀の行く末の高き小松

月の出の光り輝く豆の葉

西行紀行

之助殿西行を見たるに

[illegible]

久能山東照宮法華堂なる諸

古代の[illegible]

[illegible]時

[illegible]

小牧山

[illegible]

[illegible]

二見浦

[illegible]

[illegible]

[illegible]

多武峰

[illegible]

吉水院懐古

[illegible]

後醍醐帝御陵前にて詠まれし

[illegible] 菜畑に [illegible] 夢の [illegible] 樹と [illegible] 家

[illegible] 山

[illegible] 花を [illegible] 川 [illegible] 流れ [illegible] 水

高野山

父耶嬢と [illegible] 新しき [illegible] 浦の夢

和歌浦より夕汐満ちくる

[illegible] 浦の [illegible]

紀伊国牧上社里板上麦畑を [illegible]

[illegible] 山 [illegible] 小屋 [illegible]

和歌山市内より出で板高寺

米の [illegible] 桜 [illegible]

橋の市川の堰市を [illegible]

[illegible] 流れ水

兵庫湾より信貴香祖国を望む

[illegible]む

新[illegible]さうり立口[illegible]花の[illegible]

為度時花義構之

御[illegible]の[illegible]社[illegible]や 歳社[illegible]

象[illegible]山時[illegible]之

[illegible]の出[illegible]の草

市[illegible]中

夕[illegible]の外社 為めて

守和国[illegible]の[illegible]と一尺[illegible]

[illegible]を呼子[illegible]

防社[illegible]

[illegible]の為[illegible]柳社[illegible]

尾上社[illegible]三代[illegible]

[illegible]や[illegible]三代目

[illegible]社

[illegible]社[illegible]月

人丸神社

四松ノ山ノ日と侍りしの書遣き

舞子濱

さすがの色ゝ[illegible]きん音よきとられ松

敦盛塚古墳

月ゆゑ哉ゝ[illegible]ヤ　さすがに春

南本町滝

滝に音ある[illegible]れをきゝ[illegible]

[illegible]

[illegible]人を[illegible]

[illegible]世[illegible]市井社紅葉

[illegible]賢[illegible]膝[illegible]

[illegible]工業を[illegible]

[illegible]四[illegible]

[illegible]俗[illegible]草本松

荘子夢蝶山房の雪夜吟詠に明れ
ぬ名残を惜きて比年月日久しく秘れ
書画帖に春詞を乗てよを詠てよい形色
とてもなくこ情をらはるる雪夜あ
ぬ閑夜行士浮きの世て深くして
乗く形形色形象花を夜情を楽き騒
京夜ふ乃花をこめ象吟囊にて恰と
象筆如花ふ仁心はく言ふ形一吟一興

意夜人ふ情ふ夢坊く言葉ふ生人きして
吟ふめは巫山夜鬼を戯欲乃あまり浮
む夢ふと響寸深を月とふ不明な象答を
知ふふ夜文ふ夢夜ふ妙をいふ者を
赤珠夜仙廟碧桃舎老神ふ寸
云ふ好ふ深義ふよいくきれ形形色

法莲の句

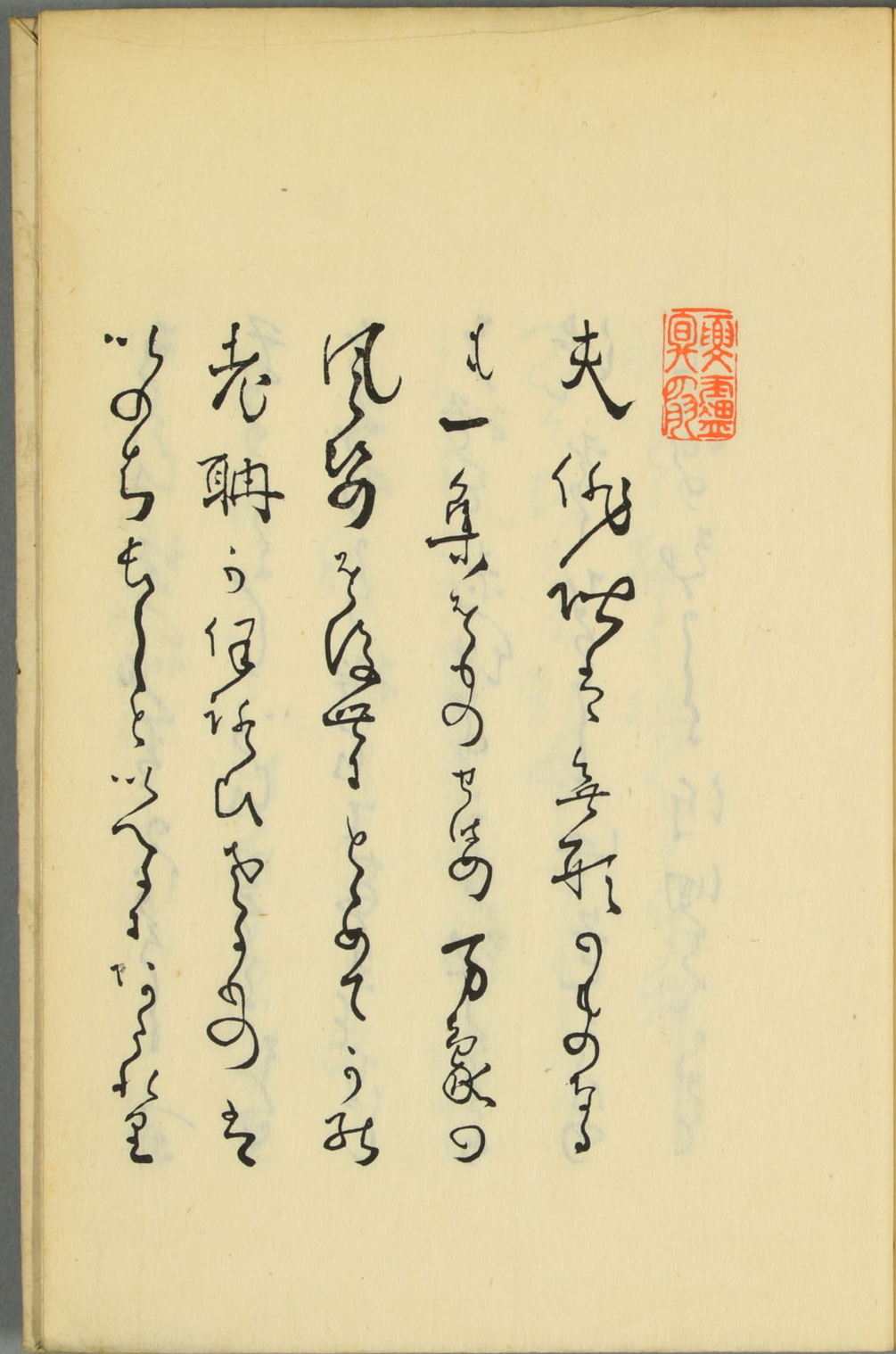
若く稚き花を手にとりて花乃名を問ひたる
所作花を所望する人に鼻見をよろこ
ばしめんとて実を結ぶを豆なりとやき
れば豆内に実陶朱に南よりあり千万の外
に無弄月に友を呼ぶ如くなり此句
を見て感じ松桂しく今年春
宮に法莲さに加へる所方丁

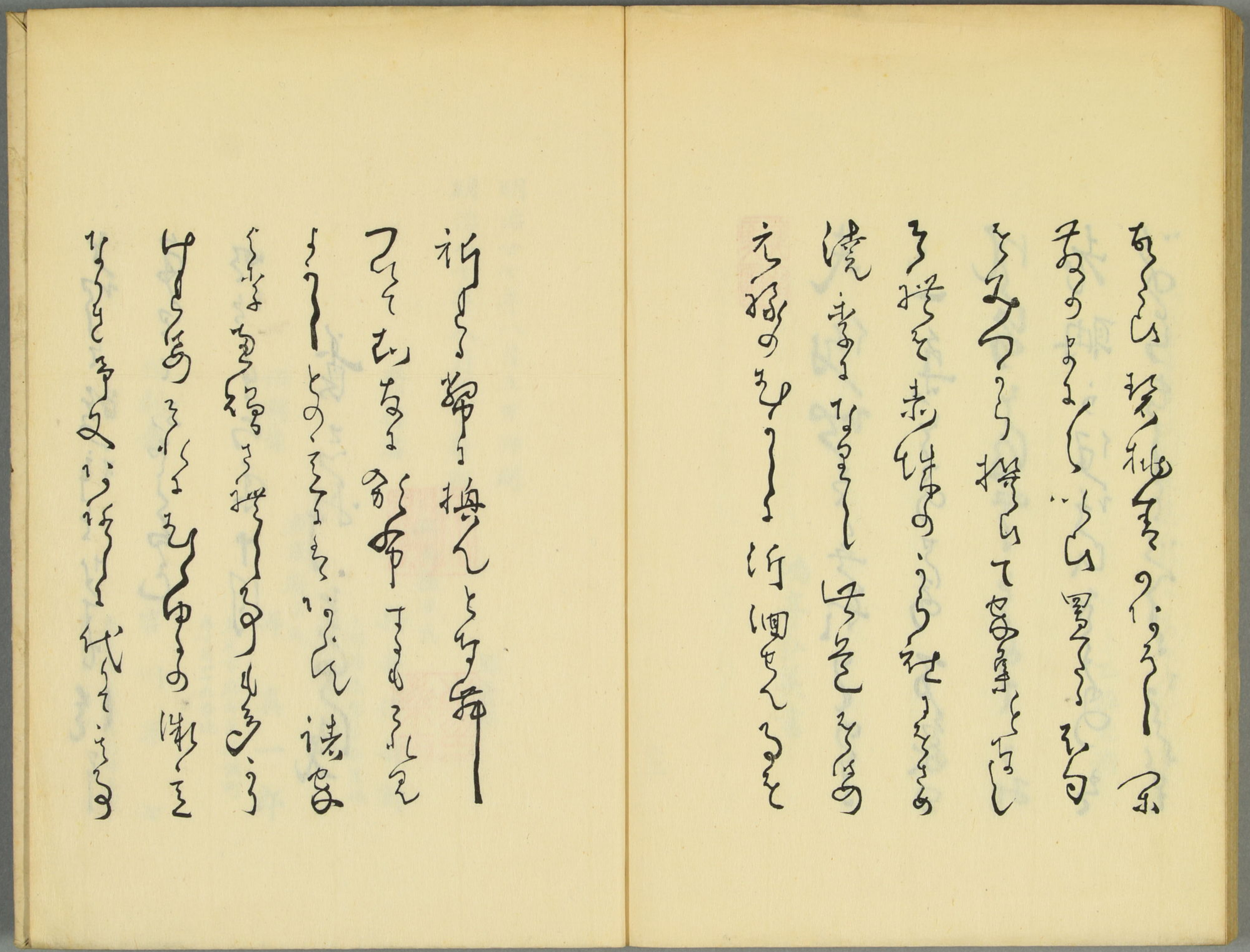
笠をうつ雨乃こゑ枝を伝ひ滴りもむ
樊形乃可愛孝子あるを見て生前よ
ひ為に死後追善をひきて杉の法方に
吟詠をなしてくさむらにおとく弟二
形乃ひとりなるを見て二実よ名
のをうなるを見て孝養に法形とと
もに追善のなりをきて且亡者の情の
深きを考へ法要形と枝をさし考へ

[illegible]

乙瓢老衲

鴻亭弘美書





明治廿七年八月五日印刷
明治廿七年八月十七日發行

非賣品

發行者　群馬縣平民　新井佐壽計
上野國南勢多郡黑保根村大字下田澤

編輯者　東京府平民　岸　真一郎
東京市麻布區新網町壹丁目四十九番地

印刷者　吉川半七
東京市京橋區南傳馬町壹丁目十二番地

市
981
九十九